

△ 翻訳 △

中世ラテン歌集「カルミナ・ブラーナ」(一)

丑 田 弘 忍 訳注

まえがき

「カルミナ・ブラーナ」は異色の歌集である。中世の桎梏から逃れ出た如く、遍歴の学生(学僧)たちは彼らのほとぼしる思いを赤裸々に歌い上げている。社会に対する批判や、酒と恋、春と踊りなどがテーマである。教会、宮廷・騎士文化が正の文化であれば、これは負の文化である。彼らの発生、実態、消滅については、新倉俊一「中世の知識人 アベラールとその後裔たち」(「ヨーロッパ中世人の世界」)、ジャック・ルゴフ、柏木・三上訳「中世の知識人」、欧文としては Helen Waddell, *The Wandering Scholars* (Constable, London) などに詳しいのでここでは省く。

「カルミナ・ブラーナ」(CBと略す)は、写本自体そうであるように、四つのグループに分けられている。第一のグループは教訓・風刺詩、第二は恋愛詩、第三は酒とぼくちと放浪生活の歌、第四は宗教劇である。それらはおおむね作者不明である。しかし最近の研究の結果、ゴットフリート・フォン・ヴィンチェスター、ヒラリウス、アルヒ

ポエータ、ヴァルター(ゴートイエ)・フォン・シャティヨン、ペトルス・ドゥ・フロア、フリーゴ・ドゥ・オルレアンなどの名があげられている。

第一のグループの教訓・風刺詩は五五篇で、貧欲、買収、金銭の力、聖職売買に対する批判、風刺、学問や徳の衰微、新しい徳体系をテーマとしている。金銭の力によって権力を得ようとする人たちが現われるのは、十二世紀の貨幣価値の増大に伴う特徴であるが、これに対して痛烈に批判する。実学(法律、カノン法)が幅をきかし、眞の学問(七自由学科)が衰えていくことを嘆く。人間の高貴さは生まれながらの血筋によるものではなく、徳によるものである、とする新しい秩序体系を打ち立てる。さらに教皇批判、十字軍、イエルサレムの解放などを歌い上げている。

第二のグループの恋愛詩は百三十一篇でCBの大部分を占めている。恋の喜び、恋の苦しみ、春の到来などをうたっている。特に自然と自我の一体感と恋の喜びが折りなされている。

第三のグループの酒とばくちと放浪生活の歌は三五篇で、宮廷生活、酒、ばくち、宴会、放浪生活などがテーマである。まさしく彼らの奔放で、墮落した生活を如実に歌い上げている。

CBの最後を飾るのは宗教劇である。これはクリスマス劇と復活祭劇である。

訳出にあたって、中世ラテン語の各語がもし出ずニュアンスを適確にとらえ、全体の雰囲気や詩的に再現することとは、訳者のとうてい及ぶところではないので、本訳は訳者の一応の解釈を示したにすぎず、語学的、あるいは意味的に思わぬ誤りがあるかもしれない。概ね直訳としたが意識としたところもある。使用したテキストは *Carmina Burana. Mit Benutzung der Verarbeiten Wilhelm Meyers, kritisch herausgegeben von Alfons Hilka und Otto Schumann. I Bd. 1930-70, II Bd. Kommentar. 1930. Heidelberg* である。なお随時次の文献を参照にした。また聖書の和訳は日本聖書協会のものを使用した。

Carmina Burana, Gesamtausgabe der mittelalterlichen Melodien mit den dazugehörigen Texten, Heimeran, 1979

Carmina, Die Gedichte des Codex Buranus Lat. und dt., Artemis, 1974

Carmina Burana, Lat u. dt Lieder der Vaganten L., Schneider, 1974

Orff, Carl: Carmina Burana, Schott. 1970

P. G. Walsh: Thirty Poems from the Carmina Burana, University of Reading, 1983

教訓・風刺詩

—

1 Manus ferens munera

pium facit impium;

nummus iungit federa,

nummus dat consilium;

nummus lenit aspera,

nummus sedat prelium.

nummus in prelatiis

est pro iure satis;

nummo locum datis

vos, qui iudicatis.

袖の下贈る手なら^(一)

信心すれど罰あたりとなるもの。

銭は人をつなぐもの。

銭は何でも解決してくれるもの。

銭は曲がったものでもまっすぐにしてしまうもの^(二)。

銭はいさかいを静めるもの。

銭は教会のおえら方には

法と同じさ。

お前さんたち、裁判官も^(三)

銭のためならなんでもするぞ。

2 Nummus ubi loquitur,

fit iuris confusio;

pauper retro pellitur,

quem defendit ratio,

sed dives attrahitur

pretiosus pretio.

hunc iudex adorat,

facit, quod implorat;

pro quo nummus orat,

explet, quod laborat.

銭が物を言うところ

法もなにもあったものではない。

ほうり出される貧乏人は

道理が守ってくれる。

でも金持ちには財貨のために

もてはやされる。

裁判官も一目置き、

金持ちの言うがまま。

銭が口を出せば、

争い事もなんのその。

3 Nummus ubi predicat,

labitur iustitia,

et causam, que claudicat,

rectam facit curia

pauperem diiudicat.

veniens pecunia.

sic diiudicatur,

銭が口を出せば、

法は墮落し、

それでゆがんだ裁判も

押し通してやっつてのける。

銭が顔を出せば

貧乏人は無理やり罪人さ。

一文もだせぬやつは

a quo nichil datur;
iure sic privatur,
si nil offeratur.

こうして有罪さ。
何もださねば
死んだも同然。

4 Sunt potentum digiti
trahentes pecuniam;
tali preda prediti
non dant gratis gratiam,
sed licet illiciti
censum censent veniam.
clericis non morum
cura, sed nummorum,
quorum nescit chorum
chorus angelorum.

おえら方はさつと
銭に手をのばし、
こうして銭をもうけたやつらは
お返しはちゃんとするぞ。
それで無法にも
銭の力で無罪放免さ。
坊主どもにや法の番より
銭の番が大切さ。
天使の歌声は
銭の歌声と無関係。

5 'Date, vobis dabitur:
talīs est auctoritas'
danti pie loquitur

「与えよ、さすれば与えられん^(四)、
これは神の言葉である」。
と信心深く喜捨する者に

impiorum pietas;
 sed adverse premitur
 pauperum adversitas.
 quo vult, ducit frena,
 cuius brusa plena;
 sancta dat crumena,
 sancta fit amena.

不信心者は敬虔に言う。
 でも逆に貧乏人には
 災難がふりかかるばかり。
 財布がふくらみや
 思いのところへ手綱を取れるさ。
 賽銭をしっかりと収めりや
 罪の穢れも落ちるといふもの。

6 Hec est causa curie,
 quam daturus perficit;
 defectu pecunie
 causa Codri deficit.
 tale fedus hodie
 defedat et inficit.
 nostros ablativos,
 qui absorbent vivos,
 moti per dativos
 movent genitivos.

銭を出せば決着をつけてくれるのが、
 裁判所のやり方さ。
 銭が尽きれば、
 コドルス^(五)はおだぶつさ。
 近頃じゃこういう法のため
 盗人どもは落ちる一方。
 やつらはおれたち生き物^(六)を
 飲みこんじゃ
 袖^(七)の下でまるめこみ、
 その上女^(八)をたのしむさ。

この歌は金銭欲、まない、聖物売買に対する風刺をテーマとしている。金は疫病のように人々の心をむしばみ、真実すら曲げてしまう。詩人は激しい怒りをもってそれを痛烈に批判する。

一 詩篇二六・一〇参照 *in quorum manibus iniquitates sunt: dextera eorum repleta est muneribus* 「彼らの手には悪い企てがあり、彼らの右の手はまいないで満ちています」 *munus* を「まない」の意味で使うのは聖書の用法である。

二 ルカ三・五参照 *et erunt prava in directa, et aspera in vias planas* 「曲がったところはまっすぐに、わるい道はならされ」

三 ここでのいう裁判とは教会法による裁判。

四 ルカ六・三八 *Date, et dabitur vobis* 「与えよ。そうれば、自分にも与えられるであろう」

五 ゴルドスとは有名なローマの風刺詩人ユヴェナリス (*Decimus Junius Juvenalis ca. 1 AD-ca. 2 A. D.*) にあらわれる乞食詩人である。

六 *ablativos*. 動詞 *auferre* (奪う) から。高僧をさす。文法用語を使って言葉遊びをしている。文法用語奪格。

七 *dativos*. 動詞 *dare* (与える) から。与えられた物をさす。文法用語与格。

八 *genitivos*. 動詞 *gigno* (生む) から。性器をさす。文法用語属格。

二

'Responde, qui tanta cupisi! modo Copia dicat.

「お前はどれだけ多くを貧ることか、答えるがよい」とコピア
は守銭奴に言う。

'Pone modum! que vis dono! — "Volo plena sit arca. —

「限度をきめるがよい。ほしだけあげよう」——「つづらを一
杯にしてほしい。」

'Plena siti! — "Adde duas! —

「一杯になれ」——「もう二つつづらを加えてほしい」——

'Addo! — "Si quattuor essent,

「加えてあげよう」——「四つになれば、申し分ないでしょう」

Sufficerent. "— Sic semper agis: cum plu- 「こうしてお前は限りなくくりかえす、たくさんあげると、
rima dono, もっとたくさんほしがり、お前は死ぬまで満足しない。」
plus queris, nec plenus eris, donec mori-
eris. ’

詩形式は普通のヘクサメーターである。豊饒の女神ユピアと守銭奴を対話させ、強欲を風刺している。

III

1 Ecce torpet probitas, ああ誠心は失なわれ、
virtus sepelitur; 徳は葬られてしまった。

fit iam parca largitas, 近頃じゃ、気前のよかった者がけちくさくなり、
parcitas largitur; けちが施しをする。

verum dicit falsitas, 贋物が本当の事を言い、
veritas mentitur. 本物がうそをつく。

Refl. Omnes iura ledunt (リフ) すべての者は法を破り、
et ad res illicitas 不法なことを
licite recedunt. 法にかなってやってのける。

2 Regnat avaritia, 貧欲がはびこり、

regnant et avari;
 mente quivis anxia
 nititur ditari,
 cum rit summa gloria
 censu gloriari.

欲張りどもが幅を利かす。
 小心者は金持ちに
 のし上ろうとあくせくする。
 銭の力で名譽を得るのが、
 最高の榮譽だから。

Refl. Omnes iura ledunt
 et ad prava quelibet
 impie recedunt.

(リフ)すべての者は法を破り、
 どんな悪いことも
 無道にもやっつてのける。

3 Multum habet oneris
 do das dedi dare;
 verbum hoc pre ceteris
 norunt ignorare
 divites, quos poteris
 mari comparere.

ドー、ダース、デディーと
 ダレの変化はやっかいだ。
 金持ちどもはこの言葉を
 なににもましていやがることか。
 金持ちどもというものは
 海によく似たもの。

Refl. Omnes iura ledunt
 et in rerum numeris
 numeros excedunt.

(リフ)すべての者は法を破り、
 ためた銭が多すぎて
 数えることも出来やしない。

4 Cunctis est equaliter

insita cupido

perit fides turpiter,

nullus fideus fido,

nec Iunoni Iupiter

nec Enee Dido.

Refl. Omnes iura ledunt

et ad mala devia

licite recedunt.

5 Si recte discernere

velis, non est vita,

quod sic vivit temere

gens hec imperita;

non est enim vivere,

si quis vivit ita.

Refl. Omnes iura ledunt

et fidem in opere

欲心は誰にでも

へだてなくつきまとうもの。

信義は醜く消え失せ、

信義に信義で報いるものなどいやしない。

ユーピテルはユーノーを^(四)

アエネーシスはデイーダーをうらぎった。^(五)

(リフ)すべての者は法を破り、

邪悪なことも

不法にもやってのける。

よく考えてみりゃ

こんな無知蒙昧な連中が、

盲めっぽう生きているなんてのは

人生じゃないっていうもの。

こうして生きているってのは

生きてるといふものではない。

(リフ)すべての者は法を破り、

信義を好き勝手に

quolibet excedunt.

踏み越えてしまふ。

この歌はフランスのラテン語詩人シャティヨン(Gauthier de Châtillon Walthar von Châtillon ca. 1135-ca. 89)の作とされている。あらゆる徳性が衰微し、貧欲がはびこることを嘆く慨世の歌である。

一 以下四行はクルチウスの言う「逆立ちした世界」である。vgl. Curtius, Ernst Robert: Europäische Literatur und lateinisches Mittelalter s. 104 ff. 邦訳一三二頁以下。

二 動詞 dare (与える)の言葉遊びによって施しを厭う吝嗇家の態度をさしている。

三 貧欲のたとえで、伝道の書一・七 Omnia flumina intrant in mare, et mare non redundat 「川はみな、海に流れ入る、しかし海は満ちることがない」に由来する。

四 ユピテルはイオの純潔を奪ってしまう。妻のユノーに気づかれんためユピテルはイオを雌牛に変える。

五 カルタゴの女王デイドーはアエネーシスに恋して捨てられ自殺した。

四

1 Amaris stupens casibus

喜びの声は

vox exultationis

悲しみがためにおしだまり、

organa in salicibus

バビロン^(二)の柳の木々に

suspendit Babylonis;

立琴を掛けぬ。

captiva est confusionis,

混乱^(一)の虜となりて

involuta doloribus

苦しみに包まれ

Sion cantica leta sonis

シオン^(三)は喜びの歌を

permutavit flebilibus.

歎きの歌にかえぬ。

2 Propter scelus perfidie,

背徳がはびこり、

quo mundus inquinatur,

この世は汚されぬ。

fluctuantis ecclesie

波間にゆらぐ教会は

sic status naufragatur.

かく難破の様。

gratia prostat et scortatur

恩寵は売り物となりはて^(四)

foro venalis curie;

法王庁の飯の種となりぬ。

iuris libertas ancillatur

法の特権は金の言うがままに

obsecundans pecunie.

下女となりはてぬ。

3 Hypocrisis, fraus pullulat

偽善、まやかし

et menda falsitatis,

うそいつわりがはびこり、

que titulum detitulat

それでお人好しの

vere simplicitatis.

名誉はだいなし。

figescit ignis caritatis,

愛の炎は冷え、

fides a cunctis exulat,

欲情のとげに

aculeus cupiditatis

刺されてかまれた者がため

quos mordet atque stimulat.

信義は消え失せぬ。

これも慨世の歌である。教会を背景とした徳が衰微することを嘆いている。

- 一 悲しみの象徴としてバビロン捕囚が想起されている。詩篇一三七・一以下参照。Super flumina Babylonis illic redimus et flevimus, cum recordaremur Sion. In salicibus in medio eius suspendimus organa nostra. 「われらバビロンの川のほとりにすわり、シオンを思い出して涙を流した。われらはその中のやなぎにわれらの琴をかけた」
- 二 バビロンの言語の混乱(創世紀十一・一一九)から、バビロンはアウグスティヌス以来現世の象徴。
- 三 イエルサレム。即ち神の王国
- 四 聖物売買

五

1 Flēta Flēnda

嘆かわしきを嘆け、

perborrete perhorrenda

おぞましきをおのけ、

Iugete Iugenda

悲しきを悲しめ、

pavete pavenda

恐ろしきを恐れよ、

dolete dolenda!

憂うべきを憂え。

2 Etates Currunt

時は流れ行き、

anni labuntur

年は滑り去り、

vitium remanet

罪悪とどこおり、

peccata crescunt
tyranni statuuntur.

悪行はつのもり、
暴君が支配する。

3 Virtus cessat

徳はかき消え、

ecclesia calcatur

教会は侮られ、

clerus ambit

聖職者は思い上がり、

Mammon regnat

銭が支配し、

simonia dominatur.

聖物売買がはびこる。

4 Pontifices errant

司教どもはまよい、

reges turbantur

王たちはまどわされ、

proceres turbant

貴族どもは脅す、

sacraria sordent

聖物室は汚れ、

leges violantur.

法はふみにじられる。

5 Abbas inflatur

修院長はえらがり、

possessa vastat

財をしいはたし、

prebendam minuit

聖職録を食いつぶす。

contio declamitat
fessa astat.

修院集会は大き過ぎ、
でも疲れて知らんぷり。

6 Militibus gaudet
laude inescatur
monachos horret
mundalia colit
frande insidiatur.

修院長は騎士どもと仲よくし、
おべっかで釣られ、
修道士たちをおどし、
俗事にうつつをぬかし、
悪だくみをなす。

7 Subiecti dissiliunt
stulti gaudent
gnari merent
contemptus attollitur
inulti audent.

家来たちは離れ去り、
愚か者は喜び、
技ある者はかせぎ、
卑しめられた者はもち上げられ、
罰をまぬがれた者はずぶとくなる。

8 Ordo languet
pudicitia sordescit
pietas refugit

秩序はみだれ、
慎しみ失なわれ、
敬虔は逃れ去り、

doctrina rarescit
sophia hebescit.

学問(レ)はまれとなり、
英知は疲弊した。

9 Insons plectitur
pupillus artatur
humilis teritur
viduata premitur
pusillus spoliatur.

罪なき者は罰せられ、
みなし子は圧迫され、
地位低き者は痛めつけられ、
やもめは抑圧され、
子供は誘惑される。

10 Ingenuus servit
servus honoratur
parasitus tonat
scurra imperitat
protervus dominatur.

自由の者は奴隷となり、
奴隷はうやまわれ、
居候ががなりたて、
道化が命令し、
厚かましい者が支配する。

11 Illuo prestat
periturus ditatur
raptor viget

放蕩者が力をなし、
偽証した者が金持ちとなり、
盗人は活気つき、

fallax excellit
Epicurus decoratur.

詐欺師は意気を上げ、
エピクルス^(三)は尊ばれる。

12 Delicie enervant
fastus turget
inimicitie exercentur
tumor furit
astus urget.

喜びが減り、
うぬぼれが満ちあふれ、
不和がはびこり、
おごりが荒れ狂い、
策略がしみわたる。

13 Blandimenta suadent
mine adduntur
rabies sevit
usura tractatur
rapine aguntur.

おべっかがせきたて、
脅し加わり、
狂気がたけり狂い、
高利が支払われ、
略奪がなされる。

14 Idcirco cedimur
pesti indicimus
detrimentum patimur

そのためおれたちは打ちたたかれ、
黒死病にたおれ、
苦痛に耐え、

grave languescimus
mesti imus.

病にやつれ
悲しみて去り行く。

15 Aër tabet
languores adaugentur
incendia consumunt
mucro sevit
timores habentur.

風も朽ち、
弛みはつのも、
火災がなめつくし、
剣が荒れ狂い、
人々は恐れおののく。

16 Aurum gallit
censores falluntur
pravi presunt
iusti desunt
meliores rapiuntur.

黄金が欺き、
裁判官は欺かれ、
悪しき者が大手をふり、
正しき者は見あたらぬ、
気高き人々は拉致される。

17 Giraldus prefuit
mores ornavit
deflendus ruit

院長ギラルドゥス様は
品行良きお方だった。
悲しいかなおなくなりになった。

ovile orbavit
dolores cumulavit.

修院をあとに残して。
そのため苦悩をつのらせた。

18 Omnipotens audi

penis tollatur

hostis fugiat

paradisus pateat

amenis foveatur.

全能なる神よ、願わくば、
この方から苦痛が消え失せ、
悪魔が退散し、
天国が開かれ、
至福に恵まれんことを。

作者は恐らく修道士であると推測される。世と修道院の墮落に対する嘆きの歌。

- 一 七自由学科（文法、修辞学、論理学、算術、幾何学、音楽、天文学）
- 二 快樂主義者
- 三 世の中の退廢に自然も呼応する。

六

Florebat olim studium,
nunc vertitur in tedium;
iam scire diu vixit,
sed ludere prevaluit.

昔は学問^(二)が栄えていたが、
今ではうんざりするものとなった。
今や学問はすたれて久しく、
博打が幅を利かせている。

iam pueris astutia
 contingit ante tempora,
 qui per malivolentiam
 excludunt sapientiam.
 sed retro actis seculis
 vix licuit discipulis
 tandem nongagenarium
 quiescere post studium.
 at nunc decennes pueri
 decusso iugo liberi
 se nunc magistros iactitant,
 ceci cecos precipitant,
 implumes aves volitant,
 brunelli chordas incitant,
 boves in aula saltant,
 stive precones militant.
 in taberna Gregorius
 iam disputat inglorius;

近頃じゃ、少年たちが
 日ならずしてずる賢くなり、
 悪意に満ちて
 英知を締め出してしまふ。
 だがずっと昔にさかのほれば、
 学生が九十才になっても、
 学業を終えて
 憩うことなどほとんどなかった。
 しかし今では十才の少年が
 軛をふるい落とすし、
 学士とばかりにいばりちらし、
 盲人ながら、盲人の手引きをする。^(三)
 まだ羽根の生えぬ鳥が羽ばたきし、
 ロバが弦をかき鳴らし、
 牛が広間で踊りを踊り、
 農夫が武器をとる。^(三)
 居酒屋でグレゴリウスが^(四)
 恥しらずにも口げんかをし、

severitas Ieronymi
 partem causatur obuli;
 Augustinus de segete,
 Benedictus de vegete
 sunt colloquentes clanculo
 et ad macellum sedulo.
 Mariam gravat sessio,
 nec Marthe placet actio;
 iam Lie venter sterilis,
 Rachel lipescit oculis.
 Catonis iam rigiditas
 convertitur ad ganeas,
 et castitas Lucretie
 turpi servit lascivie.
 quod prior etas respuit,
 iam nunc latius claruit;
 iam calidum in frigidum
 et humidum in aridum,

学識のヒエロニムス^(五)が
 わずかの銅貨で訴訟を起し、
 アウグステイヌス^(六)がやれ麦だの、
 ベネディクトゥス^(七)がやれ酒だるだので、
 せつせと市場にかよって、
 ひそひそ話をする。
 マリア^(八)はすわっているのが耐えがたく、
 マルタ^(八)は働くのがいとわしい。
 レア^(九)の腹は身ごもらず、
 ラケル^(九)の目はただれる。
 堅気なカトー^(十)が
 飲み屋へかよう。
 貞淑なルクレチア^(十一)が
 肉欲にふける。
 昔いみきらわれていたものが、
 今や広く称えられるようになった。
 熱かったものは冷たくなり、
 湿っていたものは乾き、

virtus migrat in vitium,
 opus transit in otium;
 nunc cuncte res a debita
 exorbitantur semita.
 vir prudens hoc consideret,
 cor mundet et exoneret,
 ne frustra dicat, 'Domine!'
 in ultimo examine;
 quem iudex tunc arguerit,
 appellare no poterit.

美德は悪徳となり、
 勤勉は怠惰となった。
 今やすべてのものは
 軌道からはずれてしまった。
 賢い人ならとくと考え、
 心を清くし、重荷を軽くするがよい。
 最後の審判の時に、
 「主よ、主よ」と叫んでも無駄でないように。
 主に罰せられる者は
 控訴出来まい。

古きよき時代の讚美と徳や学問の衰微を嘆く。即ちこの世界全体が逆立ちしている、という。この逆立ちした世界 (die verkehrte Welt) についてはクルチウスに詳しい (邦訳百二十一頁以下)

- 一 七自由学科
- 二 マタイ十五・十四参照 caeci sunt, et duces caecorum. 「彼らは盲人を手引きする盲人である」。
- 三 stive precones 直訳的には「農夫の伝令」の意。農夫がすきを引く時に、伝令のように牛にむかって叫ぶところから。
- 四 教皇グレゴリウス一世 (六〇四年没)
- 五 ラテン教父。ラテン語聖書ウルガータの翻訳者 (三四七―四二〇)
- 六 ラテン教父 (三五四―四三〇)
- 七 修道院制度の創始者 (四八〇―五四七?)

八 ルカ十・三八以下参照。「するとマルタという名の女がイエスを家に迎え入れた。この女にマリアという妹がいたが、主の足許にすわって、御言に聞き入っていた。ところがマルタは接待のことで忙がしくて心をとりみだし……」即ち逆立ちした世界。

九 創世紀二九・十六以下参照。レアとラケルはラバンの娘。レアは目弱く、ラケルは美しくかった。ヤコブは欺かれてレアと結婚してみごもらせたが、ラケルはみごもらなかった。

十 二三四―一四九（紀元前）、一三四年監察官になった。彼はローマ貴族の道徳的弛緩を改革した。

十一 貞女の鏡、タルキイニウスの息子セクストゥスに乱暴されたが、このことを夫に報告して自害した。

十二 マタイ七・二十一参照「わたしにむかって『主よ、主よ』と言う者が、みな天国にはいるのではなく、ただ天にいますわが父の御旨を行う者だけが、はいるのである」

七

I

Postquam nobilitas servilia cepit amare,

貴族が卑賤な連中と親しくなってから、

Cepit nobilitas cum servis degenerare.

貴族も同じく品位が落ちだした。

II

Nobilitas, quam non probitas regit atque
tuetur,

良き心に導かれず、守られぬ高貴さは

Lapsa iacet nullique placet, quia nulla
videtur.

すたれ、誰にも好まれぬ、高貴とは思えぬがため。

III

Nobilitas hominis mens ert, deitatis imago.
人間の高貴さは、神の似姿なるその精神にある。

Nobilitas hominis virtutum clara propago.
人間の高貴さは美德から生ずることにある。

Nobilitas hominis mentem frenare frenat.
人間の高貴さは怒りの心を抑えることにある。

tem.

Nobilitas hominis humilem relevarre iacet.
人間の高貴さは地に横たわる弱き者を助けることにある。

tem.

Nobilitas hominis nature iura tenere.
人間の高貴さは生れながらの権利を保つことにある。

Nobilitas hominis nisi turpia nullo timere.
人間の高貴さは破廉恥な行ないのほか何も恐れぬことにある。

IV

Nobilis est ille, quem virtus nobilitavit;
美德に伴なわれた者は高貴で、

Degener est ille, quem virtus nulla beavit.
美德に伴なわれぬ者は卑しい。

生まれながらの貴族の特権を認めず、徳を最高とする新しい階層を築く。この考えはアンドレアス・カペライヌスの「愛について」の中にもあらわれている。

八

1 Licet eger cum egrotis
 et ignotus cum ignotis
 fungar tamen vice cotis,
 ius usurpans sacerdotis.
 flete, Sion filie!
 presides ecclesie
 imitantur hodie
 Christum a remotis.

私は病人(二)の中にあつて病み、
 日陰者の中にあつて世に知られずとも、
 砥石(三)の役目をはたしたい、
 司祭(三)の権利を使つて。
 泣け、シオン(四)の娘たちよ。
 教会のおえら方たちは、
 近頃ではキリストに
 背いてしまつている。

2 Si privata degens vita
 vel sacerdos vel levita
 sibi dari vult petita,
 hac incedit via trita:
 previa fit pactio
 Simonis auspicio,
 cui succedit datio:
 ric fit Giezita.

聖職禄をもらわずに暮らしている
 司祭も助祭も
 望んだものを手に入れようとすれば
 おきまりのことをするまで。
 シモン(五)に倣つて
 契約がまずなされ、
 お涙金(六)がいただける。
 こうしてゲハジ(六)となる。

3 *Lacet ordo clericalis*

in respectu laicalis,

sponsa Christi fit mercalis,

generosa generalis;

veneunt altaria,

venit eucharistia,

cum sit nugatoria

gratia venalis.

聖職は俗人の

尊敬を失な^(七)ってしま^(七)い、

キリストの花嫁は売^(八)りに出され、

淑女は娼婦になりはてた。

祭壇は売りに出され、

その上聖餅までもが。

売り物の恩寵が

値うちがなくなった今となっても。

4 *Donum Dei non donatur,*

nisi gratis conferatur;

quod qui vendit vel mercatur,

lepra Syri vulneratur.

quem ric ambit ambitus,

idolorum servitus,

templo sancti Spiritus

non compaginatur.

神の賜物はもともと

ただで手に入れるもの。

神の賜物を買^(九)ったり買^(九)ったりする者は

シリア人のらい病^(九)におかされている。

こうして強欲にとりつかれ、

偶像のとりこ^(十)となった者は

聖霊の宮と

かかわりがない。

5 Si quis tenet hunc tenorem,

frustra dicit se pastorem

nec se regit ut rectorem,

renum mersus in ardorem.

hec est enim alia

sanguisuge filia,

quam venalis curia

duxit in uxorem.

こんな心を持つてる者は

自分を牧者と呼んでも無駄だ。

欲情の炎におぼれている者は

支配者のように自分を支配しない。

蛭にはもう一人の

娘(十二)がいて

売り物の法王庁は

この娘と結ばれた。

6 In diebus iuventutis

timent annos senectutis,

ne fortuna destituta

desit eis splendor cutis.

et dum querunt medium,

vergunt in contrarium;

fallit enim vitium

specie virtutis.

もう若い日々に

老年の年月を恐れる。

運命から見捨てられた彼らから

皮膚の輝きが失なわれないようにと。

彼らは儉約を願いながら、

その逆へと陥いる。

罪過が美德の姿をとって

彼らをだますから。

7 Ut iam loquar inanenum:

sanctum chrisma datur venum,

juvenantur corda senum

nec refrenant motus renum.

senes et decrepiti

quasi modo geniti

nectaris illiciti

hauriunt venenum.

いやなことを申すと、

聖油は売りに出され、

老人の心は若がえり、

心のたかまりを抑えない。

老人も老衰の者も

生まれたばかりの乳飲み子のように

禁じられた美酒の^(十三)

毒を味わう。

8 Ergo nemo vivit purus,

castitatis perit murus,

commendatur Epicurus

nec spectatur moriturus.

grata runt convivias;

auro vel pecunia

cuncta facit pervia

pontifex futurus.

それで誰も清く生きない。

純潔の城壁はくずれ落ち、

エピクルス^(十三)はたたえられる、

死ぬなんてことは考えられやしない。

客は御満悦。

未来の司教様は

黄金と財貨で

道が開けるぞ。

この歌もシャティヨンのゴージェイエの作とされている。教会の高僧の罪についての批判、しかも彼らの、一方では貧欲、他方では享樂をきびしく批判している。

- 一 精神的に完全でない事。
- 二 ホラティウス *Ars poetica* 五・三〇四以下参照「それ故私は砥石として役立ちたい。自ら切れないが、鉄を鋭くすることが出来る」
- 三 聖職者に対する司教の監督権。
- 四 イエルサレムは真なる教会の象徴。
- 五 金銭で聖霊が買えると考えた異端者。
- 六 シモニストの事。霊のために物品を受け取った。烈王紀下五・二〇以下参照。ゲハジは預言者エリシャの下僕。エリシャはシリア人ナアマンの癩病を直したが、その報酬を受けようとしなかった。しかしゲハジはナアマンの後を追ひ、いつわって報酬を受けようとし、癩病にかかって罰を受けた。
- 七 *iacet=liegt darnieder* (Komm. s. 13)
- 八 教会の事。
- 九 注五参照。
- 十 エペン人への手紙五・五参照。 *avarus, quod est idolorum servitus, non habet hereditatem in regno Christi et Dei* 「貧欲な者、すなわち、偶像を礼拝する者は、キリストと神との国をつぐことが出来ない。」
- 十一 蛭の二人の娘とは欲情と物欲。箴言三十・一五参照「蛭にはふたりの娘がいて「与えよ、与えよ」という。
- 十二 肉欲の事。
- 十三 快樂主義者。

九

1 *Iudas gehennam meruit,*

ユダは地獄に落ちるに値した。

quod Christum semel vendidit;
 vos autem michi dicite:
 qui septies cotidie
 corpus vendunt dominicum,
 quod superat supplicium?

かつてキリストを売ったがため。
 さあ私に聞かせてください。
 日に七度^(一)
 主の肉体を売る者^(二)たちに
 どんな罰が残されているのか。

2 Perpendite subtiliter:
 cum vendant missam viliter
 et peccent in alterutrum
 sumendo plus vel modicum,
 quod anhelant ad munera,
 finis est avaritia.

とくと考えてみなさい。
 ミサを安く売り
 贈物を求めんがため
 たっぷりもしくはちよっぴりもらって
 両方が罪をおかせば、
 最後の結果は強欲だ。

3 Petrus damnato Simone
 gravi sub anathemate
 docuit, ut fidelibus
 non esset locus amplius
 in donis spiritualibus

ペトルスはシモンを
 重い破門に罰して
 かくさとした。
 霊の贈物を売り手から買えば、
 信心ある人にも

emptis a venditoribus.

効力を失なってしまうと。

4 Multi nunc damnant Simonem

近頃シモンは

Magum magis quam demonem,

悪魔というより魔術師として呪われている。

heredes autem Simonis

でもシモンは子孫を

suis fovent blanditiis.

おべっかで愛護する。

Simon nondum est mortuus,

シモンはいまだ死せず。

si vivit in heredibus.

子孫の中に生きているから。

5 Quamvis cogente Abraham

エフロン^(三)は

Ephron sumens pecuniam

墓のための畑を売って

agrum sepulcro vendidit,

アブラハムから金をせしめたため、

Ephran vocari meruit;

エフアラン^(四)と呼ばれるに値した。

nunc Ephranitas dicere

近頃たくさんの人々は

multos potestis simile.

エフアランに似た者と呼ばわれる。

シモニストとしての聖職者の態度を批判するものであるが、その調子はさほど激しくはない。

一 七はキリスト教における吉数。

二 聖体拝領。

- 三 創世紀二十三・八以下参照。エフロンはアブラハムに無償で畑を提供しようとした。エフロンは「完全な者」の意味。
 四 エフアランは「不完全な者」の意味。

+

Ecce sonat in aperto
 vox clamantis in deserto:
 nos desertum, nos deserti,
 nos de pena sumus certi.
 nullus fere vitam querit,
 et sic omne vivens perit.
 omnes quidem sumus rei,
 nullus imitator Dei,
 nullus vult portgre crucem,
 nullus Christum sequi ducem.
 quis est verax, quis est bonus,
 vel quis Dei portat onus?
 ut in uno claudam plura:
 mors extendit sua iura.

見よ、荒野あらので呼ばわる者(二)の聲が
 広くかなたにとどろけり。
 われらは砂漠なり、われらは見捨てられたり。
 われらは罰を受くるは確実なり。
 誰しも永久とわの生命いのち(三)に縁なきにて
 すべては生きながら滅す。
 ともかくわれすべては罪人なり。
 誰しも神のまね人にあらず、
 誰しも十字架を運ぶを欲せず、
 誰しも先達キリストに従わざり。
 誰ぞ真なる者か、誰ぞ善なる者か。
 誰ぞ神の重荷を運ぶ者なりしや。
 せんじつめればかくかくなり。
 永却(三)の罰はおのが権利を広げり。

iam mors vegnat in prelati:
 nolunt sanctum dare gratis,
 quod promittunt sub ingressu,
 sancte mentis in excessu;
 postquam sedent iam securi,
 contradicunt sancto iuri.
 rose fiunt salinca,
 domus Dei fit spelunca.
 sunt latrones, non latores,
 legis Dei destructores.
 Simon sedens inter eos
 dat magnates esse reos.
 Simon prefert malos bonis,
 Simon totus est in donis,
 Simon regnat apud Austrum,
 Simon frangit omne claustrum.
 cum non datur, Simon stridet,
 sed si detur, Simon ridet;

それは今、高僧どもに出て来たり。
 無償で聖体を授けるを欲さぬ。
 叙階の折には
 法悦して約束せりしものの、
 無事、高座にすわった今、
 聖なる法をふみにじる。
 薔薇の花は茨となり、
 神の館は洞穴となりぬ。
 彼らは伝道者にあらずして追いはぎなり。
 神の掟の破壊者なり。
 シモンは彼らのもとに座し、
 おえら方が罪人であるを認む。
 シモンは善人よりも悪人を好み
 贈物でうづもれ、
 南で支配し、
 修道院をまるっと打ちこわせり。
 与えられぬと、シモンは歯ぎしりし、
 与えられると、微笑む。

Simon aufert, Simon donat,
 hunc expellit, hunc coronat,
 hunc circumdat gravi peste,
 illum nuptiali veste;
 illi donat diadema
 qui nunc erat anathema.
 iam se Simon non abscondit,
 res permiscet et contundit.
 iste Simon confundatur,
 cui tantum posse datur!
 Simon Petrus hunc elusit
 et ab alto iusum trusit;
 dum superbit motus penna,
 datus fuit in gehenna.
 quisquis eum imitatur,
 cum eodem puniatur
 et sepultus in infernum
 penas luat in eternum! Amen.

シモンは盗み、与えり、
 ある者を追い払い、ある者に王冠をいただかせり。
 ある者に重い疫病を課し、
 ある者に婚礼の衣裳をまとわせり。
 破門されし者に
 王冠を与えり。
 シモンいまだ身をひそめずして、
 物事みだれり。
 かくも大なる力いただきたる
 かのシモンかきみだされんことを。
 シモン・ペトルスはこの男をからかい、
 上から下へ突き落とせり。
 翼を揺り動かしおごれる
 シモンは地獄に落されたり。
 シモンをまねぶ者は
 シモンとともに罰せられ、
 地獄に葬られ
 永久に罪をあがなわんことを。アーメン。

これもシモンリストとしての聖職者に対する批判である。人間の罪深い姿がまさしく聖職者にあらわれ出ている、とする。

- 一 説教者の声、イザヤ四〇・三、マタイ三・三、ヨハネ一・二十三。
- 二 キリストの事。
- 三 直訳は死。
- 四 シモンは Auster (南風) のように権勢高いの意。

十一

In terra summus rex est hoc tempore

今日この頃この世の最高の王は金なり。

Nummus

Nummum mirantur reges et ei famulan-

王たちは金を崇拜し、金に仕える。

tur.

Nummo venalis favet ordo pontificalis.

売りに出される司教の座は金に好都合。

Nummus in abbatum cameris retinet domi-

金は僧院長どもの室で支配権を握っている。

natum.

Nummum nigrorum veneratur turba prio-

黒い⁽¹⁾僧院長の群は金を敬う。

rum.

Nummus magnorum fit iudex conciliorum.

金は大きな会議の裁判官となる。

Nummus bella gerit, nec si vult, pax

金は戦いを生み、望まざれば、平和はこず。

sibi deerit.

Nummus agit lites, quia vult deponere
dites.

金は訴訟を起す、富者どもを零落させんがため。

Erigit ad plenum de stercore Nummus
egenum.

金は貧者を泥沼から引き上げる。

Omnia Nummus emit venditque, dat et
data demit.

金はなんでもかんでも売り、買い、与え、与えたものを奪い取る。

Nummus adulatur, Nummus post blanda
minatur.

金は媚びて、また脅す。

Nummus mentitur, Nummus verax re-
peritur.

金はうそをつき、本当の事を言うこともある。

Nummus periuros miseros facit et peri-
tuos.

金は偽証せし者を不幸にし、滅びさせる。

Nummus avarorum deus est et spes cupi-
dorum.

金は守銭奴の神にして強欲者の希望。

Nummus in errorem mulierum ducit a-
morem.

金は女の恋を狂わせる。

Nummus venales dominas facit imperia-
les.

金は領主の妃を売り物にする。

Nummus raptores facit ipsos nobiliores.

金は盗賊どもを気高くする。

Nummus habet plures quam celum sidera fures.

金は、天の星よりもたくさん泥棒を生む。

Si Nummus placitat, cito cuncta pericula vitat.

金持ち(金)が訴訟を起せば、簡単に危険から逃れられる。

Si Nummus vicit, dominus cum iudice dicit.

金持ちが勝訴すれば、領主も裁判官もこう説明する。

“Nummus ludebat, agnum niveum capiebat.”

「金がたわむれ、つかんだ小羊は白かった。」

Nummus, rex magnus, dixit: “Niger est meus agnus.”

偉大な王、金は告白した、「私の小羊は黒い。」

Nummus fautores habet astantes seniores.

金には長老の味方がついている。

Si Nummus loquitur, pauper tacet; hoc bene scitur.

金が物を言えば、貧乏人は押し黙る。これはよくわかること。

Nummus merores reprimit relevatque labores.

金は悲しみを追いやり、苦しみをやわらげる。

Nummus corda necat sapientum, lumina

金は賢者の心をだめにし、頭をくもらせる。

cecat.

Nummus, ut est certum, stultum docet
esse disertum.

金は実に愚か者を能弁にする。

Nummus habet medicos, fictos acquirit
amicos.

金持ちは医者にとりまかれ、真の友はいない。

In Nummi mensa sunt splendida fercula
densa.

金持ちの食卓にはごちそうがぎっしりならんでいる。

Nummus laudatos pisces comedit piperatos
Francorum vinum Nummus bibit atque
marinum.

金持ちは胡椒(五)のきいた上等の魚を食べる。

金持ちはフランク人のと海のかなたのぶどう酒を飲む。

Nummus famosas vestes gerit et pretio-
sas.

金持ちは名のある高価な衣裳を身につける。

Nummo splendorem dant vestes exterio-
rem.

衣裳は金持ちの外身を輝かせる。

Nummus eos gestat lapides, quos India
prestat.

金持ちはインド産の宝石を身に付ける。

Nummus dulce putat, quod eum gens tota
salutat.

金持ちは誰からも挨拶されるのをうれしく思う。

Nummus et invadit et que vult oppida
tradit.

金は目をつけた町を攻撃し、見捨てる。

Nummus adoratur, quia virtutes opera-
tur.

金は奇跡をなすがため、敬われる。

Hic egros sanat, secat, urit et aspera
planat.

金は病を癒す、切って、焼いて傷をなおす。

Vile facit carum, quod dulce ert, reddit
amarum.

金は安いものを高くし、甘いものを、苦くする。

Et facit audire surdum claudumque sal-
ire.

つんぽを聞えるようにし、手足のきかない者を跳びはねさせ
る。

De Nummo quedam maiora prioribus ed-
am:

金の偉大な力を昔の人に知らせれるなら。

Vidi cantantem Nummum, missam
celebrantem;

金が歌い、ミサを行うのを見た。

Nummus cantabat, Nummus responsa par-
abat.

金が歌い、答える用意をした。

Vidi, quod flebat, dum sermonem facie-
bat,

金が説教する間に、泣いたのを、

Et subridebat, populum quia decipiebat.

人々を欺いたがため、笑ったのを、見た。

Nullus honoratur sine Nummo, nullus
amatur.

誰も金なくしては讃えられず、愛されない。

Quem genus infamat, Nummus; "Probus
est homol," clamat.

人々にのしられる者を、金は「この人はすばらしい」と叫ぶ。

Ecce patet cuique, quod Nummus regnat
ubique.

金がどこでも支配せるは誰にも明らか。

Sed quia consumi poterit cito gloria Num-
mi,

しかし金の栄光はすばやく消えてしまうがため、

Ex hac esse schola non vult Sapiaentia
sola.

学問は単なる知恵であるを欲しない。

金がこの世を統べていると、詩人はためいきまじりに、嘆く。金はこの世の幸福をもたらすかもしれない、しかしそれは感性的、利利的にあるにすぎず、真の幸福は真の学問にあると結論づける。

- 一 黒い僧服を身につけるフランシスコ会及びクリュニ修道院の長。
- 二 いわゆる Gerichtsherr のことで、裁判権所有者にして裁判官任命権者。
- 三 白は正、黒は不正を表わす。
- 四 陪審員のことか。
- 五 上流階級では外国の薬味が好んで用いられた。

十二

1 Procurans odium effectu proprio
 vix detrahentium gaudet intentio.
 nexus est cordium ipsa detractio:
 sic per contrarium ab hoste nescio
 fit hic provisio;
 in hoc amantium felix condicio.

不和の種まき中傷する人は、
 めったに楽しまない。
 中傷は心と心をつなげてしまう。
 こんなことをしても敵に知られずに
 恋をつのる。
 これで恋人たちは幸せ。

2 Insultus talium prodesse sentio,
 tollendi tedium fulsit occasio;
 suspendunt gaudium pravo consilio,
 sed desiderium auget dilatio:
 tali remedio
 de spinis hostium uvas vindemio.

彼らの嫉妬は役に立つ。
 いやな気持ちを除く機会がきた。
 彼らは策をめぐらして私の喜びを引き延ばす。
 でも延びれば想いはつのる。
 そうしたことをすれば
 私は敵のいばらからぶどうを集めることになる。

嫉妬する者はその目的をなかなか果たすことが出来ない。恋人同士を別れさせようとすれば、かえって恋は深まっていく。

十三

I
Invidus invidia comburitur intus et extra.

嫉妬する者は嫉妬で内も外も焦がされる。

II

Invidus alterius rebus macrescit opimis.

嫉妬する者は他人のぜいたくのためにやせ細る。

Invidia Siculi non invenerere tyranni

嫉妬は、シチリアの暴君でさえ思いつかなかった

Maius tormentum. qui non moderabitur
ire,

拷問。怒りを制せない者は

Infectum volet esse, dolor quod suaserit
aut mens.

苦痛と怒りでなされたことが実らぬよう願うであろう。

III

Invidiosus ego, non invidus esse laboro.

私は妬むのではなく、妬まれるようにしよう。

IV

Iustus invidia nichil est, que protinus
ipsos

嫉妬より公平なものはない。嫉妬はただちに

Corripit auctores excruciatque suos.

その持主を襲い、さいなむ。

V

Invidiam nimio cultu vitare memento.

衣裳への嫉妬をおこさぬよう心せよ。

嫉妬に対する格言が集められている。Ⅱはホラチウスの *Epistulae* 「書簡」 1, 2, 57~60からそのまま取り入れられている。

十四

1 O varium

ああ移り気な

Fortune lubricum,

運命の気まぐれよ、

dans dubium

汝はあやふやな

tribunal iudicum,

判決を下し、

non modicum

汝の恵みは

paras huic premium,

愛でんとする者に

quem colere

なみなみならぬ

tua vult gratia

報いをあてがい、

et petere

車輪の高き所を

rote sublimia,

望みし者を

dans dubia

かえってあやふやにし、

tamen, prepostere

貧しき者を

de stercore	汚濁から
pauperem erigens,	引き上げ、
de rhetore	雄弁家を
consulem eligens.	執政官に選ぶ。
2 Edificat	運命は築き、
Fortuna, diruit;	壊す。
nunc abdicat,	かつては愛 ^め でし者を
quos prius coluit;	今は拒む
quos noluit,	嫌いし者を
iterum vendicat	また愛 ^め でる。
hec opera	これぞ何たる
sibi contraria,	矛盾か。
dans munera	いともはかなき
nimis labilia;	報いを与う。
mobilia	運命の約束は
sunt Sortis federa,	移ろいやすし。
que debiles	弱き者を富ませ

ditans nobilitat

高貴となし、

et nobiles

貴き者を

premens debilitat.

押し無力となす。

c Quid Dario

治世はダリウスに^(二)

regnasse profuit?

何の益ありしか、

Pompeio

ローマはポンペイウスに^(三)

quid Roma tribuit?

何を与えしか。

succubuit

ともに剣にて

uterque gladio.

倒れぬ。

eligere

中庸をとること、

media tutius

車輪の高き所を

quam petere

求めて

rote sublimius

いみじ頂きから

et gravius

落つるより

a summo ruere:

無難なり。

fit gravior

幸運より落つるは

lapsus a prosperis

いとぎびしく、

et durior
ab ipsis asperis.

苦難より落つるは
いと苦しい。

4 Subsidio

移り気な運命の

Fortune labilis

手によりて

cur prelio

なぜ戦って

Troia tunc nobilis,

あの時あてなるトロイアは

nunc flebilis

今は悲しみて

ruit incendio?

炎に倒れしか。

quis sanguinis

誰ぞローマ人の後裔

Romani gratiam,

の恵みを、

quis nominis

誰ぞギリシア人の

Greci facundiam,

名声を、

quis gloriam

誰ぞカルタゴの

fregit Carthaginis?

栄光を破りしか。

Sors lubrica,

移り気な運命は、

que dedit, abstulit;

与えては奪い去る。

hec unica

唯一なる運命は

que fovit, percultit.

愛でては滅ぼす。

5 Nil gratius

運命の恵みより

Fortune gratia,

好まじきものなし。

nil dulcius

栄光より

est inter dulcia

甘美のうちにて

quam gloria,

甘美なるものなし、

si staret longius.

久しくとどまりたれば。

sed labitur

されど移ろう

ut olus marcidum

萎えた草の如く、

et sequitur

今や花咲く野と

agrum nunc floridum,

なれり。

quem aridum

明日には乾いた地と

cras cernes. igitur

なるを知れり。されば、

improprrium

われふさわしからぬ

non edo canticum:

歌は作らず。

o varium

ああ移り気な

Fortune lubricum.

運命の気まぐれよ。

気紛れな運命の女神像はポエティウス以来中世を通して最も好まれたテーマであった。運命の車輪はCBの写本の第一葉にもあらわれている。車輪の上に位置していた者は、回転していつ下に降るかわからない。詩人はポエティウスの「哲学の慰め」第二巻にも現われる如く、中庸に満足する美徳を説く。

- 一 人間は運命に対峙し、不確実な判決を受ける人に似ている。
- 二 ペルシアの王、アレキサンダー大王に征服され殺害された。
- 三 カエサル政敵、カエサルと戦って彼により殺害された。